
ウォレス・ザ・ウィルレスと悪魔殺しのウィーニ

青い鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウォレス・ザ・ウィルレスと悪魔殺しのウィーニ

【Nコード】

N1094T

【作者名】

青い鴉

【あらすじ】

pixivから転載。悪魔召喚の儀式を覗いたウィーニは悪魔殺しとなることを迫られる。

悪魔を直視するということは、死ぬよりも惨いことである。女盗賊のウィーニはそのことを知らなかった。魔法使いのウォレス・ザ・ウィルレスが今も生きており、丘の上の古城に住んでいるという噂さえ、老人の語るおとぎ話だと信じていた。

だから、ウィーニがその罰を受けたのは、当然だったとも言える。ウィーニは死んだ。ウォレスの悪魔召喚の儀式を覗き見たために悪魔と目と目が合った時、ウィーニの魂は砕かれた。儀式は失敗した。悪魔は逃げ出した。どうしようもなかった。いかにウォレスといえども、本当にどうしようもなかったのだ。

「この小娘に、どんな罰を与えてやろうかのう」ウォレスは老人のような口調で言った。

燭台に照らされた顔は子供のそれである。紫のロープを引きずり、不自然に大きな手を振るって、ウォレスは禁忌と絶望が結婚したような呪文を紡いだ。

「悪魔は逃げた。この罪は、ただ死んだところで償えるものではないぞ、小娘よ。死ぬより辛いことが、世の中には随分と沢山あるのだからな」

砕かれた魂が、一片一片の魂が、震え、悶え、一握の砂のように渦巻いていく。それはおよそ半分しかなかったが、確かにウィーニの魂だった。それは小さく集まり、固まると、ウィーニの肉体に再び宿った。それで死という確かな救済は、ウォレスによって御破算にされた。

「小娘よ。お前の名前は何だ？」「ウィーニ」ひどい頭痛を我慢して、ウィーニは答えた。

「ウィニ（勝者）か。愚かな名前だ。お前はもはや何物にも勝てないというのに」

「なぜ、私を死んだままにしてくれなかったの」

ウィーニは訊いた。自分が確かに死んだという確信があった。それで物語は終わるはずだった。好奇心が猫を殺す。ありふれた話だ。「なぜ？ なぜ、じゃと。野に放たれた悪魔を放置して、お前は自分だけが惰眠を貪れるとも思ったのか？ 厄介事は全部僕と他の人間に任せて、子猫のように死ねると思うたのか？ 呆れた小娘じや。よいかウィーニ、金髪の小娘よ。言っておく。お前は死ねぬ。役目を果たすその時まで。永遠に」

「役目？」ウィーニは再び訊いた。

「悪魔を捕まえることじゃ！」ウォレスは小さく嗜めるように答えた。そして台座に据えられた一對のシミターを指差した。

「お前はあの悪魔殺しの武具を使い、悪魔を弱らせ、封じねばならん。僕の手助けを期待してくれるなよ。これは貴様が撒いた種なのじゃ。お前はそれを自分の手で刈り取らねばならん。ウィーニよ。罪深いリビングデッドよ。それまで死という甘美な旅は、お前に与えられぬものと知れ！」

ウィーニはシミターと封印の宝玉を渡され、古城から追い出された。だからこの話は、ウィーニが悪魔を探し出して打ち倒すという、ただそれだけの物語である。

ウィーニがまずしなければならぬのは、友人との別れ、そして旅の支度であった。ウィーニはいつも通りに友人と飯を食い、酒を飲んだが、砂を嘔み、泥水を飲むような具合であった。友人が冗談を言っただけで笑ったところで、顔を引き攣らせるのがやっとであった。何と言っても、ウィーニは既に一度死んでいるのだ。これまでの全ての生活は色褪せ、世界は灰色一色に見えた。

ウィーニは少ない蓄えを吐き出して、四歳の馬を買った。どうせ何を食べても砂の味しかないので、食料は味のしないパンで十分だった。足りない路銀は盗むしかあるまい。ウィーニは所詮、その日暮らしの盗賊なのである。

悪魔殺しのシミターに触れると、自然と行くべき道が感じられた。

ウィーニはその方角に馬を走らせた。そこで、ウィーニは様々な地獄を見た。

ある村では、井戸に毒が入れられていた。その村の人々は乾きで死んだ。

ある村では、燃え落ちた穀倉庫があつた。その村の人々は飢えで死んだ。

ある村では、謎の疫病が流行つていた。その村の人々は高熱で死んだ。

ある村では、動かなくなつた子供たちがいた。その村の人々は絶望して死んだ。

それらは、悪魔が、戯れにやったことだつた。ただ通過するだけで、悪魔は村々を滅ぼさずにはいられなかつたのだ。まるで子供が遊ぶように、悪魔は絶望を振り撒いていった。そして、つまりそれは、元を糺せば、全てウィーニのせいであつた。

焚き火の傍で、ウィーニは泣いた。己の高慢さと好奇心とが、悪魔を野に放つたのだ。全ての人々の死は重しとなつてウィーニに乗り掛かつてきた。それでも、ウィーニは逃げることはできなかつた。どれだけ泣いても、ウィーニは償えないのだ。

「私にできるのは、悪魔の火を消し止めることだけ。先回りして、悪魔を見つけ、ぶつ殺すことだけ」

ウィーニは眠りの中に救いを見出した。そこには儚い過去の温もりがあつた。辛い幼少時代も、今にして思えば幸福だつた。自分はもう死んだのだという思いが溢れてきた。ウィーニは死んでただの機械になり下がつたのだ。悪魔を殺す機械に。

やがて季節は秋になり、遂にウィーニは悪魔を見つけた。

紳士服を着た蟾蜍ひきがえるのような、およそ似合わぬ恰好で、それは街を歩いていた。尾行し、酒場に入る。目が合った瞬間、あの悪魔だと分かつた。この視線は一度体験している。間違えようがなかつた。

「これはこれは、お嬢さん」悪魔は言った。

「遠路遙々御苦労様といったところでしょいか。しかし私を殺しても、得なことなどありませんよ。むしろ協力して、あのウォレスめを退治してはどうですか。私もあの男には何度も煮え湯を飲まされていましてね。どうです？」

ウィーニはシミターを抜き放ち、両手に構えた。店の中で悲鳴が上がり、客は逃げ出した。

「おやおやこれは剣呑なことだ。ところで金銀財宝には興味はありませんか？ 至上の悦楽は？ 永遠の名声は？ 無限の名誉は？ 私と協力すれば、あなたは世界を手に行けるかもしれないのに、どうして私を殺そうとなさるのですか？」

ウィーニは誘惑の言葉を無視して叫ぶ。

「私が欲しいのは死だ！ お前を殺して、私も死ぬ。それで物語はめでたしめでたしで終わる。簡単な取引だろう」

「それでは話が簡単すぎますねえ。そう簡単に行くとお思いですか？」

酒場の壁から巨大な顎あごが現れ、咄嗟に避けたウィーニの右腕を喰らった。顎は、悪魔殺しのシミターを吐き出す。

「私はただの悪魔。明白な弱点のある吸血鬼や人狼とは違う！ ただ一匹の悪魔なのですよ！ たかが小娘一人に！ この私が！ 黙って倒されるとお思いでしたか！」

悪魔はウィーニの腕から流れる血に笑った。床に転がるシミターに笑った。

悪魔殺し。なんと滑稽な言葉だろう。そんなことは有史以来起こったことなど無いというのに。殺せないから悪魔と呼ばれるのに。人間とは、かくも愚かな生物いきものなのか。

「たかが腕の一本とつたくらいで、いい気になるな！」

ウィーニは左手でシミターを拾って叫んだ。

「ちようどいいハンデだ。片手で二本突き刺してやる。さあかかってこい悪魔野郎。その首落として仕舞いにしてやる！」

ウィーニは片腕で馬を走らせた。右腕を縛った包帯から血が滲んでいたが、かまわず古城へと馬を走らせた。三日三晩馬を走らせて、ウィーニはウォレスに死を希こいねがった。

「死は眠りではない。死は安息ではない。死は救済ではない。死は輪廻ではない。それでもなお、お前は死を願うか。小娘よ」

「それでもなお、死を、私に」ウィーニは願った。

ウォレスはその不釣り合いに大きな手を棺の中のウィーニに翳した。そしてウィーニはばたきと倒れ、もう二度と、動き出すことは無かったのである。

(後書き)

おそらく初めて、起承転結からプロットを起こし、短編小説を書いてみました。

ご評価お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1094t/>

ウォレス・ザ・ウィルレスと悪魔殺しのウィーニ

2011年5月14日10時55分発行